

聖書: エステル記1章1～12節

説教: 神の備え

## 1 時代背景

昨年の四月、ちょうどコロナの感染拡大が言われていたときにダニエル記を開いて神の語りかけを聞いておりました。今日から見ていくエステル記は、ダニエル記の女性版と言えるかもしれません。もちろん、ダニエルとエステルは時代が違うし、置かれた背景も、そこで出会った困難の種類もまったく異なる。しかし、外国の地において唯一の神を信じ続けていったという点では共通しているのです。

世の中はコロナ禍がおさまらず、これから再び感染が拡大するのではないかとさえずりわさされ、教会の交わりもできない状態が依然として続いております。このような試練の中にあつて、私たちはどのように神を信じ続けていくのか。しばらくエステル記に目を留めていきます。

そこで聖書本文を見ていく前に、まずエステル記の時代背景を抑えておきたいと思えます。既に見たことのあるダニエル書と比べると理解しやすいでしょう。週報のアウトラインに簡単な年表を載せておきますのでそれをご参照下さい。ダニエルが補囚となってバビロンに連れて行かれたのがBC605年で、その後586年にエルサレムがペルシャの手によって陥落してしまいます。538年に第一回帰国と称しておりますが、クロス王がユダヤ人に帰国してもよいとの勅令を出します。そしてそれからおよそ50年の後のBC486年に今日のところに登場するクセルクセスが王に即位し、478年にエステル記の主人公であるエステルが王妃として迎えられていく。ちょうどそのときに、王の側近であったハマンがイスラエル人に対する大虐殺計画を画策し、それを阻止するためにエステルがいのちをかけていく。そのことがこの後の流れになっています。

## 2 王の権威

### 1) 大きな宴会

そこで今日の内容に入るわけですが、ここには言わば皇室のスクャンダルようなことが書かれているだけで、信仰の話は一つも出て来ない。この後も、次の王妃がどのようにして選ばれていったのかという話しが2章の終わりまで続きます。このところのどこに恵みがあるととまどうでしょう。それ

でも1章、2章が書かれているのは、理由があるからです。

クセルクセス王が治めていたペルシャ帝国の首都はスサは、今のイラン南西部にあったと言われ、加えていまからおよそ二千五百年前がこの事件の舞台です。当時の文化や習慣がどんなものであったか、専門家でもない限り分かる人はいない。ところが、当時の文化や習慣をあらかじめ知っておかないと、エステル記を正しく理解することがむずかしい。それで1章と2章があると考えられます。

具体的にはこうです。おそらく王の即位を記念してということだったのかもしれませんが。王はあるとき大臣はもちろん、全支配地域のリーダーを呼び集め、七日間に及ぶ大きな宴会を開きます。当時、ペルシャ帝国の威力は東はインドから西はクシュ、いまのエチオピアまで及んでいて、そこからリーダー全員を呼ぶのですから、クセルクセス王の力がどれだけ大きなものであったのか、これを読むだけでわかります。

### 2) 王宮の園、長椅子

それにとどまらず、宴会場の様子についても実に詳しく書いています。5, 6節。「この期間が終わると、王は、スサの城にいた身分の高い者から低い者に至るまでのすべての民のために、七日間、王宮の園の庭で宴会を催した。白綿布や青色の布が、白や紫色の細ひもで大理石の柱の銀の輪に結び付けられ、金と銀でできた長椅子が、緑色石、白大理石、真珠貝や黒大理石のモザイクの床の上に置かれていた。」

クセルクセス王の富がどれほど大きかったのかわかるようにと具体的書いた。それは確かでしょう。しかしもう一つ理由がある。ヒントは「王宮の園」と「長椅子」です。いま、大パーティー会場の中に華やかに飾られている王宮の園と長椅子、このふたつが7章8節でもう一度出てくるのです。どういう場面で出るか。エステル記の最大の山場となる悪者ハマンが王によってさばかれる場面、それがここでおこなわれる。そのことがオープニングの場面でさりげなく触れられている。まるで映画のような作り方です。

## 2 王の法令に逆らうならば

### 1) エステルの通らなければならなかった道

そしてもう一つ。これは次回にまた触れることになると思いますが、王の法令がいかに権威を持っていたかを、あらかじめ読者に知ってもらうために書かれている。というのは、王妃となったエステルは、ユダヤ人に対する大虐殺計画を阻止するために、法令に逆らわなければならない場面が後で出てくる。その法令とはこのようなものでした。4章11節。「召されないのに奥の中庭に入って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられる。ただし、王がその人に金の笏を差し伸ばせば、その人は生きながらえます。」

何も事情を知らないと、こう思うかもしれませんが。「ああ、それは形だけのことで、実際はそんなことはおこなわれていなかったのだろう。」もしそうであれば、エステルが通っていく道はそれほど困難な道ではなかったことになる。でも実際はどうだったでしょう。王の命令に逆らうことがどんな結果をもたらすのか、この大宴会の席で起きたひとつの事件から、私たちはまざまざと知らされていくことなるのです。

## 2) クセルクセス王

事件の発端は、酒に酔った王の思いつきから始まります。11節。「王妃ワシュティに王冠をかぶらせて、王の前に連れて来るようにと言った。彼女の容姿がすばらしかったので、その美しさを民と首長たちに見せるためであった。」

自分の妻がいかに美人であるかを宴会に招いた人たちに自慢したかった。そんなことをしなくても宴会場の飾りや、金の杯を見せただけで十分なはずなのですが、なんともたわいのない男のプライドです。

## 3) 王妃ワシュティ

ワシュティはどうしたか。12節。「しかし、王妃ワシュティは宦官から伝えられた王の命令を拒み、来ようとはしなかった。そのため王は激しく怒り、その憤りは彼のうちで燃え立った。」

なぜ王の命令に背いたのかはわかりません。おそらくワシュティは、王の命令に背いても王は厳しい処置はしないだろうと踏んでいたのでしょう。ところがその後王妃の王冠が剥奪され、王宮から追放されてしまう。どんなに容姿が美しくても、王に逆らう者は厳しく罰せられる。エステルは、同胞のイスラエル人を救うために、やがてこの厳しい道を歩まなければなるのです。

## 3 神の備え

### 1) 一つのささいな事件から

歴史には「もし」とか「たら」は禁物なのでそうですが、それでももしあのときワシュティ事件が起きなかったならどうなったかと考えます。当然、エステルが王妃に迎えられないことはありません。それだけなら問題がない。しかしこの後でハマンと呼ばれる人物がクセルクセス王の側近に抜擢されたことで、ユダヤ人全体に大きな危機がふりかかってくる。彼は、自分の個人的な感情からユダヤ人全員を皆殺しにしようとして王に讒言をし、王の名前ですべてのユダヤ人を根絶やしにするとの法令を出させるのです。いまみたとおり、王の法令は絶対です。だれも逆らうことはできません。

もしエステルが王妃に迎えられていなかったならどうなっていたでしょうか。もちろん神の力は偉大ですから、どのような方法によってでも神のみこころは成し遂げられたでしょう。ですが、このときはエステルがいのちをかけて、ユダヤ人虐殺計画を止めるよう王に対して進言する、それが神のみこころだったのです。

そのみ心を実現するために、ある日突然物事が動いていくわけではありません。今日見ておわかりのように、ユダヤ人虐殺の法令が出される何年も前からすでに神が備えてくださっていた。それもごくごくささいなことが発端でした。王が酒に酔って思いつきで出した命令に対して、王妃ワシュティが背いた。庶民の目には格好のゴシップネタにしか見えなかった一つの事件が、実は神のみこころを成し遂げていく糸口になっていたのです。

### 2) 証し

物事はすべて偶然の積み重ねであって、神の備えとかそんなものはないという方もおります。そんな方にも、神の備えがあることを知っていただくために、私の身に起きたことを証しさせていただきます。

今から21年前の神学校に入ってまだ一ヶ月ほどのことです。神学校どうしのソフトボール大会があったときに、私の同級生が顎に打球を受けて骨折して埼玉医大付属病院に入院してしまいました。それでクラスの何人かと一緒に車に乗り、山をいくつか越えて見舞いに行きました。こんな遠くの病院にまた来ることはないだろう。そのときはそう思った。ところがそれから半年後、同じ病院に行くことになったのです。中一になっていた息子が病気で倒れて、町の病院で調べてもらっても、肝臓が悪いことは分かるが、原因がわからないと言って治療をしてくれないのです。このままでは死んでし

もうかもと途方に暮れていたときに、私の家に住んでくれていた医師であるH先生から電話をもらいました。先生に息子の病状を話したら、「すぐに私が知っている専門の先生を紹介するその病院に行きなさい」と言ってくれた。それが埼玉医大付属病院だったのです。なぜすぐに肝臓専門の先生を紹介してくださったのか。H先生はまさに当時生誕肝移植の最先端におられて、学会で顔なじみだったからだそうです。ちなみに、息子の病気は専門の先生でなければ見つけられないほど非常に珍しい病気でした。経験した本人の私でさえ、あまりにもできすぎた話に思えてしまいます。しかし、これが事実なのです。

私たちがいま困難の中にあっても、すでに神は道を備えて脱出の道を用意して下さる。それは決して遅くはない。そのことを信じてまた歩んでまいります。